

中学校における ALT とのチーム・ティーチングのあり方

—英語科教育法（2003）受講生のマイクロ・ティーチングを通して—

相 原 和 恵

1. 序 論

日本の中学校の英語の授業に Assistant Language Teacher（以下 ALT）が登場するようになって 17 年の年月が流れようとしている。現在茨城県においては、ALT が単発的に学校を訪問するワンショット訪問、ある一定の頻度で学校を訪問するレギュラー訪問、一年間を通して同一学校に滞在するベーススクールなど、一回限りの特別扱いの授業から年間指導計画の中に位置づけた授業まで、いろいろな形で日本人英語教師（以下 JTE）と ALT が協力して指導にあたるチーム・ティーチング（以下 TT）が見られるようになってきている。

ALT の存在は、教室の中に実際に近い英語のコミュニティーを作り出すこと、日本の英語指導法を学習活動中心から言語活動中心に変えること、国際理解の基礎を培うことなどに大きな役割を果たしてきた。しかし同時に、ALT が英語教育に関する専門的知識や指導力を持っていないこと、彼らの滞在期間が短いため計画的・継続的な指導を行うことが難しいこと、生徒数に比べて彼らの絶対数が少ないため学習効果を上げることが難しいこと、JTE が TT のあり方について基本的な認識を十分に持っていないこと、JTE が彼らと授業内容についてじっくり話し合う時間を取れないことなど、TT が抱える問題が数多く存在することも事実である。今後中学校の英語の授業においてより効果的な TT が展開されるためには、これらの問題点がひとつでも多く解決されなければならないだろう。

本論では、相原・長澤（2004）に引き続き、上記の問題点の中から「JTE が TT のあり方について基本的な認識を十分に持っていないこと」を取り上げその対応策を考える。第 2 節では、TT を体験中の中学生と過去にそれを体験した大学生を対象としたアンケート調査結果から中学校における TT の状況を示し、第 3 節では、大学生がその TT をどのようにとらえているかを検討する。第 4 節では、相原が 2003 年度に茨城キリスト教大学で担当した「英語科教育法」において学生が行なった TT を記述し、第 5 節では、それらの授業の分析に基づいて中学校における望ましい TT のあり方を明らかにしていく。

2. 中学校における TT の状況

中学校における TT の状況を示すために、中学生を対象としたアンケート調査結果（相原 1998, 1999）を取り上げる。調査対象は、レギュラー訪問を実施している茨城県内の公立 S 中学校の 3 年生 252 名とベーススクールである同 M 中学校の 3 年生 133 名である。

この調査結果から、中学生の TT への関心度を読み取ることができる。図 1 から 90% 以上の生徒が TT を好んでいることがわかる。その理由としては、「本物の英語が聞けるか

ら」(51%),「外国の文化がわかるから」(40%),「楽しいから」(9%)が上げられる。英語学習を好む生徒は20%であるから,TTは彼らが英語学習に興味をもつ動機付けになるといえるだろう。より効果的なTTの展開が望まれる。

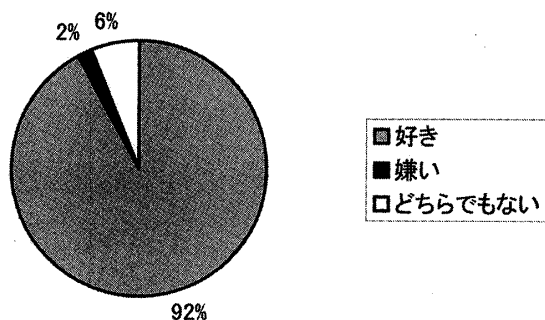


図1 中学生のTTへの関心度

調査対象を広げるために大学生を対象としたアンケート調査結果を取り上げる。調査対象は2003年度に相原が茨城キリスト教大学で担当した「英語科教育法」の受講生13名である。彼らの出身中学校の所在地は、水戸市(3名)、ひたちなか市(3名)、日立市(2名)、笠間市(1名)、瓜連町(1名)、茨城町(1名)、千代田町(1名)、神栖町(1名)であり、同一中学校出身者は1校2名であるから、このアンケート調査結果からは茨城県内のいろいろな中学校の状況を知ることができるだろう。

まず、学生には中学時代のALTとの授業の「楽しかった度合い」を5段階で評価してもらった(「5」が満足の度合いが大きい)。その結果を図2に示す。82%の学生が「5」または「4」と評価している。その理由として下記のような記述が見られた。

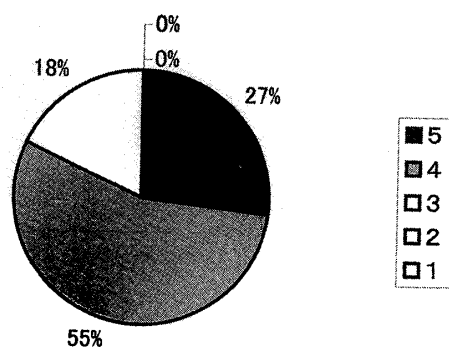


図2 TTの楽しかった度合い

- ・いつもの授業と違って活動の場が多く楽しかった。新鮮さを感じた。
- ・自分の英語がALTに通じた喜びを味わうことができた。
- ・実際の発音や表現などをALTとの授業の中で学ぶことができた。
- ・外国人と話す機会があまりなかったので楽しかった。
- ・日本人の先生がALTと英語を話すのを見てかっこいいと思い、自分もいつかは英語を話せるようになりたいと思った。

- ・外国の文化に触れることができ楽しかった。

次に、ALT との授業の「ためになった度合い」を 5 段階評価してもらった（「5」が満足の度合いが大きい）。その結果を図 3 に示す。彼らは皆中学校を卒業して 5 年以上たっているため正確な記憶は望めないが、ある程度の客観的判断が期待できると考えた。それを裏付けるように「楽しかった度合い」と「ためになった度合い」には差が見られる。82% の学生が「楽しかった度合い」を「5」または「4」と評価しているのに対し、「ためになった度合い」を「5」または「4」と評価した学生は 64% に留まった。どちらの度合いも高く評価した学生が過半数を越えることから、中学校における TT は概ね良い成果をもたらしているといっているだろう。しかし、「ためになった度合い」を「2」と評価している学生の存在（9%）を見逃すことはできない。

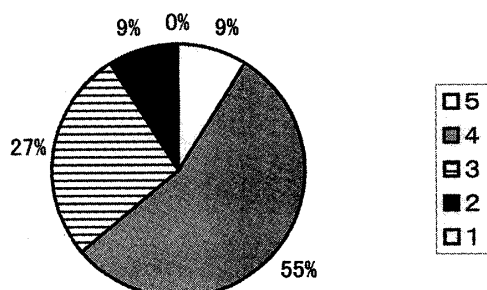


図 3 TT のためになった度合い

この調査結果からは「楽しかったが、ためになったとはいえない」TT の状況が浮かび上がってくる。その理由を下に示す。ALT の勤務態様についてはやむを得ないにしても、その他は授業内容に関するものであり、指導者の工夫によって改善できるものである。

- ・ALT が常勤していないので接する機会が少なく効果が上がらない。
- ・ゲームが多く楽しかったが息抜きという感じがした。
- ・文法などを教えてもらえないので受験には向かない。
- ・生徒数が多いため ALT とあまり接する時間がない。
- ・ALT がいる期間が限られているので、それに合わせて学習予定が変更され、戸惑うことが多かった。
- ・ALT の話している英語があまり理解できなかった。
- ・定期テスト前や受験前の ALT との授業は日本人の先生が迷惑そうだった。

ここで授業内容に焦点を当てる。学生が記述した TT の授業内容は、ゲーム（7 名）、Q & A（3 名）、会話（2 名）、発音練習（2 名）、音読練習（2 名）、外国文化紹介（2 名）、歌（1 名）、覚えていない（1 名）である。

この回答から TT の授業内容についていくつかの問題点が明らかになる。まず、多くの学生が授業内容としてゲームを上げている。「ゲームをやって景品をもらったことしか覚えていない」「ALT との授業はほとんどゲームだったので息抜きの時間だった」などの記

述も見られた。彼らの出身中学校の ALT の勤務態様はレギュラー訪問が多く (64%), TT を計画的・継続的に行うことが難しいこと, JTE と ALT が授業内容について話し合う時間が十分に取れないこと, ゲームは中学生が好む活動であることなどが, ゲームが多くなる理由として上げられるだろう。ゲームを取り入れて成功する例は数多く存在する。しかし「楽しかったが, ためになったとはいえない」と評価される例も数多く存在するのが現実である。土屋 (1995) が述べるように, 授業の中で行われる活動は, たとえそれがゲームであっても目的が明確でなければならない。授業にゲームを取り入れる場合は, その目的や効果, 取り入れ方を十分に考慮すべきである。

ゲーム以外の授業内容を見てみると, 和田 (1990) が TT の具体的な定義として上げている「生徒・JTE・ALT 三者のインタラクションを主体としたもの」や「言語活動を主体とし三者のコミュニケーションを重視したもの」が少ないように思われる。言語の知識を指導するだけでなく, 活動によって言語の使用を指導するタイプの授業がより多く展開されるべきである。卯城 (2001) も JTE と ALT が話し合うべき授業評価内容として「それぞれの活動がコミュニケーションでインタラクティブであったか」を上げている。

「文法などを教えてもらえないので受験には向かない」「ALT がいる期間に合わせて学習予定が変更され戸惑うことが多かった」「テスト前や受験前の ALT との授業はキャンセルされることが多かった」などの学生の記述からも, 授業内容に関する問題点を見出すことができる。授業内容が普段の授業とかけ離れていたり, 息抜き化あるいはお遊び化したりしている場合には, TT を実施する機会は制限されるだろう。TT がそれほど特別なものでなくなっている現在では, 教科書を使って行う, 普段の授業と極端に変わらない, しかし普段の授業と相補関係を持った授業を展開することが必要になってきている。TT を普段の授業と同じ指導手順で行うことの必要性は土屋 (1995) に, 教科書を使用することの必要性は卯城 (2001), 塩澤 (1993) にも示されている。

「ALT の英語があまり理解できなかった」「テスト前や受験前の ALT との授業は日本人の先生が迷惑そうだった」などの記述には, JTE と ALT が協同で授業をしている雰囲気があまり感じられない。日本の教育職員免許法に基づく資格を持たない ALT は単独では授業をすることができないのであるから, ALT の特色を最大限に生かせるような授業を JTE が主導すべきである。ALT との TT は JTE 同士の TT とは別の意味を持っているといえる。

TT を成功に導くためには ALT の協力が必要不可欠である。彼らの協力を得るためには, まず JTE が TT について正しく認識しておく必要がある。相原・長澤 (2004) は TT の基本的なあり方を次のように示している。

- ・ TT は, JTE, ALT, 生徒の協同作業であること
- ・ TT においては JTE が主導権を持つこと
- ・ TT においては, 教科書を使い, 普段の授業と極端に変わらない, しかし普段の授業と相補関係を持った授業を行うこと
- ・ TT は, ALT が英語文化の体現者であり, 純正な (authentic な) 英語の提供者であるという特色を最大限に生かせるような言語活動を主体とする授業であること

JTE は TT のあり方を正しく認識し, その認識の上に立って, 自分の授業方針を的確に

ALT に伝えられるだけの英語運用力を持たなければならない。そのスキルは英語教員養成の過程で充分教育される必要があるだろう。

3. TT に対する大学生の意識

相原が担当する「英語科教育法」の受講生の多くは英語教師になることを希望しているため、将来は TT を行う可能性が高いといえる。本節では、彼らが TT に対してどのような意識を持っているかを検討する。

まず、彼らに中学校の英語の授業における TT の必要性を 5 段階評価してもらった（「5」が必要性の度合いが大きい）。図 4 に示すとおり、91%の学生が TT の必要性を認めている。その理由として下のような記述が見られた。

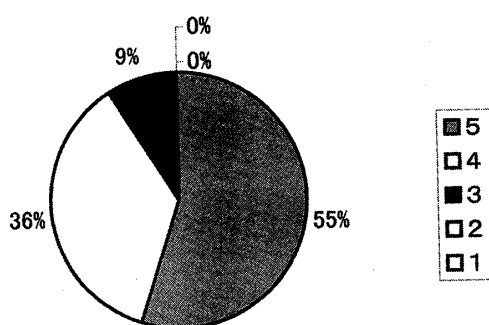


図 4 中学校の英語の授業における TT の必要性

- ・英語嫌いの生徒にも生きた英語に触れさせ興味を持たせる良い機会になる。
- ・ネイティブと触れ合うことにより国際交流ができる。
- ・TT は外国人と接することができる良いチャンスだと思う。
- ・日本人の話す英語だけでなく外国人の話す本物の英語に触れることが大切である。
- ・読み書きよりも会話重視の授業ができる。
- ・いつもと違った雰囲気 of 授業は生徒に英語に興味を持たせることになると思う。
- ・発音だけでなく文化の違いなども実際に聞くことで身につけられる。
- ・JTE 自身も学ぶことがたくさんあり勉強になると思う。

次に、彼らが TT を行うことにどの程度意欲を持っているかを尋ねてみた。「(TT を行いたいと) とても思う」学生は 55%、「思う」学生は 45%であり、全員が TT を行うことに対して積極的な態度を示している。しかし同時に、TT を行うことに不安を「とても感じる」学生は 36%、「多少感じる」学生は 64%いる。その理由は次のとおりである。

- ・自分の英語力に自信がない。言いたいことが ALT にきちんと伝わるか不安である。
- ・どのように授業を立案したらいいのかわからない。
- ・授業が滞ったりしないかが不安である。生徒の反応が心配だ。
- ・TT の進め方がわからない。
- ・ALT をうまく使える自信がない。
- ・自分の経験した TT があまり良くなかったので自分にできるかわからない。

- ・一人で授業をするのも不安なのに ALT と一緒にではもっと不安だ。

これらの理由を「未知のものに挑戦することへの不安」と「自己の英語力に対する自信の欠如」に分けることができる。今回は「未知のものに挑戦することへの不安」を軽減させるために、相原の「英語科教育法」で現実の TT を模したマイクロ・ティーチング（以下 MT）を取り入れてみることにした。本授業で TT を経験させることは、その不安を多少でも取り除くことになるであろうし、望ましい TT のあり方や形態について考えさせることにもなるだろう。望ましい TT の形態については、TT のあり方や英語の運用力と同様に、英語教員養成の過程で取り扱う必要があると考える。

4. 大学での実践

4.1 「英語科教育法」の位置付け

本授業は茨城キリスト教大学文学部の3年生を対象としたもので、中学校で実際に英語の授業を展開する時に必要な知識と技術を身に付けることを到達目標としている。学習指導要領の下で中学校における外国語（英語）教育は如何にあるべきかを理解し、その理解の上に立って、指導計画作成、MT、相互評価を行う。テキストは茨城県の多くの中学校で使われている *New Horizon English Course* (2002) を使用した。授業計画は下記のとおりである。

- 第1時 オリエンテーション、英語教育と英語科教育
- 第2時 新学習指導要領
- 第3時 4つの言語活動、評価
- 第4時 学習指導案の成り立ち、新出語句指導例紹介、学習指導案作成 A
- 第5時 マイクロ・ティーチング A、相互評価
- 第6時 文法指導例紹介、学習指導案作成 B
- 第7時 マイクロ・ティーチング B、相互評価
- 第8時 ALT とのチーム・ティーチング、学習指導案作成 C（英語）
- 第9時 マイクロ・ティーチング C、相互評価
- 第10時 反省会
- 第11時 異文化理解指導例紹介、学習指導案作成 D
- 第12時 マイクロ・ティーチング D、相互評価
- 第13時 英語の歌
- 第14時 プレゼンテーション
- 第15時 まとめ

第1時のオリエンテーションでは、学生に本授業で何を学びたいかを上げてもらった。その内容は、学習指導案の書き方（10名）、授業の進め方（10名）、ALT との TT の進め方（4名）、教材研究の進め方（3名）、生徒とのかかわり合い（2名）、英語科教育とは（1名）、英語嫌いを減らす授業（1名）、小学校における英語（1名）、評価の仕方（1名）、教育実習の心得（1名）である。この回答から彼らがより実践的な知識と技術を身に付けた

いと考えていることがわかる。上記の授業内容は彼らの要望をほぼ満たしているといっ
てよいだろう。

4.2 事前指導 (第8時)

TT に関する授業は第8, 9, 10 時の3時間取り扱いで実施した。第8時では TT の歴史・
目的・実際・問題点などを概説し、次時 (第9時) には水戸市立緑岡中学校で3年間 ALT
を務めた経験をもつ Christopher Rosser 氏をゲストに招いて TT の MT を実施することを
予告した。学生には下記の内容で学習指導案を作成させた。

題 材 Reading Plus 「由美の夢—地球はひとつ」 *New Horizon English Course 1*

指導内容 本文指導 (音読・内容把握)

指導時間 15 分

指導案が出揃ったところで相原が Rosser 氏と最終打ち合わせを行った。打ち合わせ事
項は、当日の役割分担、ハンドアウトと資料の確認、指導案のチェック、MT を行う学生
の選出などである。

4.3 本時の指導 (第9時)

第9時の授業は Rosser 氏の自己紹介ビンゴゲームで始まった。景品付きということも
あって盛り上がり、なごやかな雰囲気作りに一役買っていた。

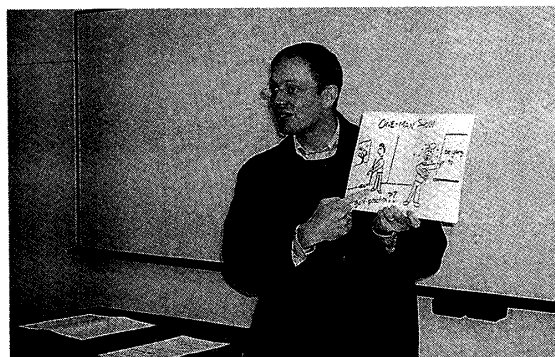
Rosser 氏は実在する4つの TT のタイプを紹介しながら TT の理想形を示した。学生は
自分の経験した TT がどのタイプに属する
かを振り返りながら、TT のあり方や JTE
に課された役割を理解することができた。

Type A : The Human CD player

Type B : One Man Show

Type C : All Alone

Type D : The Super Team



次に、4名の学生が Rosser 氏と TT の MT を行った。指導内容は4.2に示したとおりで
ある。それぞれの MT の概要を下に示す。

その1: 学生 I による MT

生徒にネームプレートを作らせ ALT との授業の雰囲気作りをした。ALT によるテキ
スト本文のリーディングを聞かせることで、生徒に本文の概要をつかませようとしてい
る。内容把握の確認は T&F テストで行った。音読練習で学習のまとめをしている。

その2: 学生 N による MT

ALT によるテキスト本文のリーディングを聞かせて、生徒に本文の概要をつかませよう
としている。試訳のプリントを使って内容把握の確認を行った。発展として、惑星の写
真を数枚提示し、その英語の名称をクイズ形式で学習させた。

その3：学生UによるMT

ALTと簡単な会話を行い英語学習の雰囲気作りをした。ALTによるリーディングを聞かせたり音読させたりすることによって、生徒に本文の概要をつかませようとしている。ディクテーション問題を解かせて内容把握の確認を行った。音読をさせて学習のまとめとしている。

その4：学生TによるMT

ALTの自己紹介を取り入れてALTとの授業の雰囲気作りをした。本文の説明を簡単にした後、ALTによるテキスト本文リーディングを聞かせ更に音読させることによって内容を把握させようとしている。その確認はT&Fテストで行った。ワークシートを音読させて学習のまとめをした。

Rosser氏からは発表者ひとりひとりにそれぞれの授業へのコメントが伝えられた。その内容については第5節で紹介する。最後に全体に対し、今回は4名の学生としか授業ができずに残念であること、指導案に示されたアイデアがどれも素晴らしかったこと、自信を持って英語教師を目指して欲しいことなどを述べ、第9時の授業が終了した。

4.4 事後指導（フィード・バック）（第10時）

第10時は事後指導を行った。まず、Rosser氏からのコメントを紹介した。

- Your preparation was great! I thought your lesson plans were well thought-out and organized. Organization is important for having a smooth class.
- I really liked the visual aids that so many of you brought to class. Visual aids and any extra materials that you bring will make your class more interesting.
- Mixing subjects is a good idea. For example, teaching students the English names of the planets. Some students like science or sports or math or drawing more than English. Good teachers help students enjoy learning.
- Try to use as much English in the class as possible, even if you feel nervous or are afraid to speak. Show the students how to speak English with a foreign person, and don't ever be afraid to make mistakes.
- The most important thing that you can teach your students during the team teaching classes is that English is a tool for communication. Help your students to make friends with the ALT. Give them a chance to interact with the ALT.

学生の感想は次のとおりである。

- 今までには生徒として授業を受ける立場にいたけれど、今回は先生としてクリス先生と2人で授業をするということで、不安や戸惑いがありました。将来中学校で教えるにあたってとても良い経験になりました。
- 「TTとはなにか」という基本的で重要な点をわかりやすく学習できたのでよかった。
- とても緊張しましたが、クリス先生と授業ができて良い経験になりました。
- 今まで生徒の立場でTTを見てきたので、今回は先生の立場に立って考える機会がで

きて良かった。常に協力し合いながら取り組んでいくことが大事だと思った。

- ・今回はクリス先生と TT はできなくて残念だったけれども、やはり本場の英語を授業で聞けるというのはよかった。ゲームをしたり先生についての話を聞いたり、とても楽しい授業だった。
- ・教える立場から教わる立場を体験し、ALT との授業という特別な授業をその両方の立場から理解できました。とても貴重な経験ができてよかったです。
- ・クリス先生に ALT との授業の良い例と悪い例を教えてもらい、ALT との授業の仕方がわかった。ALT も TT をする上で苦労があることがわかった。
- ・もっと英語でクリス先生に指示することができれば良かったと思う。
- ・やはり ALT がいるだけで随分クラスの雰囲気が変わるものだと思います。
- ・ALT のほめ方が参考になった。

学生には今回の TT に関する授業の「ためになった度合い」を 5 段階評価してもらった（「5」が満足の度合いが大きい）。図 5 に示すように、91%の学生が「5」または「4」と評価している。具体的な記述は下に示す。

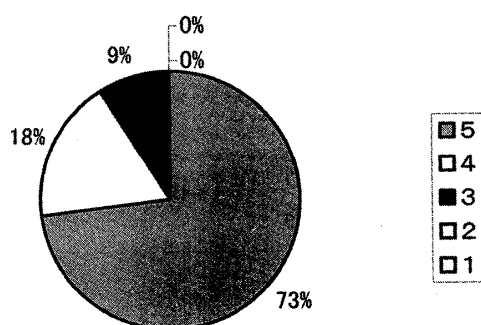


図 5 TT に関する授業のためになった度合い

- ・TT がどのようなものなのか知ることができ、とてもためになりました。また、アドバイスをたくさんもらえて良かったです。
- ・実際にやってみてコミュニケーションのとり方やどのように TT を進行していったらいいかがわかった。TT は普段以上の準備が必要だということもわかった。
- ・どのように TT をやるべきかがよくわかりました。また、的確なアドバイスに納得しました。
- ・TT の良い例と悪い例を学習できたので、今後にとっても役に立つと思った。また、普段の ALT との交流が大切であることもわかった。
- ・ただ教科書を読むだけの授業ではなく、visual aids や他の教科を使って楽しみながら授業を進めることが大切だということがわかりました。ALT から見てどんな授業が良いかという話も聞けて、生徒の立場から先生の立場へと考え方が変わりました。
- ・JTE と ALT だけがコミュニケーションするのではなく、それをどうやって生徒と ALT との会話にもっていくかが大切であり難しいと改めてわかりました。

- ・今までは教師の立場で TT のあり方を考えたことがなかったが、今回友達の MT を見てとても参考になりました。
- ・ALT の英語を身近で聞けたこと、どういうふうに授業を展開していけばいいのかわかったこと、2 人の先生が協力することが大切であることがわかりました。
- ・ALT にいろいろなことを頼むのはちょっと悪いかなと思っていたけれど、ALT はそれを期待していることがわかりました。
- ・間違ってもいいから ALT と会話することが TT にとってとても大事なのだから、自分が思っている以上に取り入れるべきだと思いました。

今回の授業を受けて TT に対する考え方が「すごく変わった」学生は 55%、「多少変わった」学生は 36%であった。その内容をまとめると、① JTE は間違いを恐れず英語を使って ALT とコミュニケーションしているところを生徒に見せることが大切であること、② ALT と一緒に授業を作り上げることが大切であること、③ ALT を積極的に「使う」ことが大切であること、④授業以外で ALT との良い関係を築くことが大切であることの 4 点である。

3 時間にわたる TT に関する授業を終えて、92%の学生が教員育成の過程で TT を体験することは「とても必要である」と答えている。今回の授業で彼らは Rosser 氏が ALT 経験者であるということによってそれほど苦勞することなく TT を体験することができ、「未知のものに挑戦することへの不安」を多少は取り除くことができたようである。TT のあり方、TT における JTE、ALT それぞれの役割、TT の望ましい形態などを、JTE の立場から考えることができたことも彼らにとっては良い経験だったと思われる。彼らは 2004 年度には教育実習を控えており、何人かはそこで TT を行うことを予告されている。教育実習の準備という点から考えても、英語教員育成の過程で TT を体験することは必要であるといってよいだろう。



5. 考 察

本節では、Rosser 氏と TT を行った 4 名の学生の授業内容を、相原・長澤 (2004) が示している TT の基本的なあり方の観点から分析し、望ましい TT の形態を示していく。

5.1 学生 I の MT から

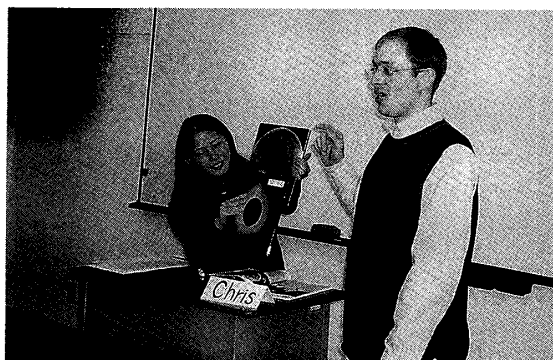
I は生徒にネームプレートを作らせている。生徒の名前がわかるということは ALT に安心感を与え、ALT に名前で指名されることで生徒は親近感を覚える。I のこの試みは、TT は JTE, ALT, 生徒三者の協同作業であることを念頭に置いた雰囲気作りの良い例といえる。ネームプレートやネームタグを新年度に準備し TT 時には活用したい。雰囲気作りの例として相原 (1999) は英語室の活用を紹介している。前出の M 中学校には英語室が設置されており、そこには辞書、ビデオデッキ、ピクチャーカード、CD プレーヤーなどが常備されている。環境整備は ALT の手によるものであり、季節感あふれる環境作りは「楽しい気分になれる」「明るい雰囲気がいい」「アメリカの教室にいるみたい」と生徒に好評である。英語的な環境の整備は英語学習に対する生徒の心理的障壁を取り除く上で有効である。また、教師が教室に出向いて授業をする日本の中学校のシステムに違和感を覚える多くの ALT にとっても英語室の使用は好評である。

本時の目標は、テキストの本文を読み内容を把握することである。I は ALT による本文のリーディングを聞かせることで、生徒に本文の概要をつかませようとした。リーディングのスピードを変えることによって生徒の理解を助けるなど、I が主導権を持ちながらも協同作業的な側面を見せている。T&F テストで内容把握の確認を行ったが、答えを言わせるだけでなく問題文を和訳させそれに I が説明を加えるなどの丁寧な取り扱いを Rosser 氏は高く評価している。学生の経験では本文の内容把握は英文和訳によることが多かったようだが、近年は英語を英語で理解させたり、トップダウン処理を求めたりする傾向が見られ、T&F テストや Q&A, サマリーを書かせる (完成させる) ことなどによって内容をとらえさせる学習が多く見られるようになってきている。相原 (1998, 1999) はレポート学習の活用を提案している。学習した内容をレポートにまとめさせるのだが、生徒自身の言葉でまとめさせることで表面的ではない理解度を確認できる。

5.2 学生 N の MT から

N も 5.1 に示した I と同様に、ALT によるテキスト本文のリーディングを聞かせることで生徒に本文の概要をつかませようとしている。内容把握の確認は英文和訳によって行われたが、生徒に和訳させるのではなく N が試訳を読むというもので、生徒にとっては受動的な学習となった。英文和訳学習に関しては賛否両論があるが、中学校で英語を学習する場合、母語の効果的使用は生徒の理解の助けになると思われる。相原 (2001) は英文和訳学習例として「英文訳読リレー」を紹介している。例えば、英文 *My brother rides to school.* を複数の生徒に和訳させるのだが同じ訳文は禁止する。彼らは頭をひねりながらも「私の兄は自転車に乗って学校に行きます」「僕の兄は自転車通学です」「兄はチャリ通です」など工夫をこらした訳文を発表する。

本課では地球が登場するが、Nはその発展として、木星、太陽、火星、土星などの写真を示して、その英語の名称をクイズ形式で学習させている。この学習は JTE, ALT, 生徒の協同作業であるだけでなく、ALT が純正な英語の提供者であるという特色を生かした言語活動を主体とした学習の良い例である。Rosser 氏は visual aids を効果的に利用した点と他の教科(教育活動)に関連性を持たせた点を高く評価している。相原(1999)は前者の例としてデジタルカメラを使って作成した教師や生徒のピクチャーカードの活用を、後者の例としてレポート(旗のデザイン画と英語による説明)をもとに実際に学級旗が作成され体育祭で使われた「学級旗のデザイン作成」を紹介している。



相原(1999)は前者の例としてデジタルカメラを使って作成した教師や生徒のピクチャーカードの活用を、後者の例としてレポート(旗のデザイン画と英語による説明)をもとに実際に学級旗が作成され体育祭で使われた「学級旗のデザイン作成」を紹介している。

5.3 学生UのMTから

UはALTとその日の朝食のメニューを話題に簡単な会話を行い英語学習の雰囲気作りをしている。多くの生徒が興味を持っているALTについての情報を英語で得るという活動を取り入れることによって、生徒の好奇心を学習意欲に変え、ALTが英語文化の体現者であるという特色を十分に生かした学習内容である。相原(1998, 1999)はALTが英語で自分の部屋の様子を説明し生徒がそれを絵に表す「ALTの部屋」、ALTが前日の行動を英語で話し生徒が質問に答える「ALTリスニングテスト」を紹介している。

UもALTによるモデルリーディングを聞かせることによって生徒に本文の概要をつかませようとしているが、聞き取りのポイントを与えていることと音読を加えているところが前出の2例と異なる点である。本時で取り扱う主な言語活動は「読むこと」であるが、この活動には「まとまりのある文章の概要や要点を読み取ること」と「声に出して読むこと」の2つの種類がある。中学校の英語の授業では前者に重きが置かれることが多いが、竹田(1995)が示しているように、音読には①授業が活性化する、②文章に対して愛着がわく、③文字や語句を正確に身につけることができる、④言語感覚を養うことができる、⑤文章を読み深めることができるなどの効果があり、授業に積極的に取り入れたい活動である。音読指導の例として、相原(1999)は「音読テープの作成」を提案している。生徒ひとりひとりに本文音読を録音したテープを提出させ、教師がコメントを録音して返却する。周りの目を気にせず音読できるだけでなく、BGMを吹き込んだりDJを演じたりと生徒それぞれの工夫が見られて面白い。

Uは穴埋め形式のディクテーション問題で要約文を完成させることによって内容把握の確認を行っている。解答のポイントやイラストを加えるなど工夫の見られるワークシートをRosser氏は高く評価している。

5.4 学生TのMTから

TはALTの自己紹介を取り入れALTとの授業の雰囲気作りをしている。この試みは

5.3 で示した ALT との会話と同様に、ALT が教室にいる利点を生かした学習内容である。レギュラー訪問実施校やベーススクールでは毎回自己紹介というわけにはいかないが、ALT が日本文化や日本人についてどのような印象を持っているかをインタビューしてレポートにまとめる「ここが変だよ日本人」(相原 2001) など、ALT が英語文化の体現者であるという特色を生かした学習は数多くある。

T は本文の内容をとらえさせる時、簡単に本文の説明をしてから生徒に ALT による本文リーディングを聞かせたり音読させたりしている。赤松 (2003) は、文章の骨格となる情報を正しく理解し大意を把握するためには、読解過程のできるだけ早い段階で適切なスキーマが働かなければならないと述べている。これはリーディング指導の初期の段階で、JTE はこれから読む文章の内容に関して生徒がどれだけの背景知識を持っているかを確認する必要がある、もし十分な背景知識がない場合にはそれを補わなければならないことを意味する。T の試みはその観点から見て効果的であったといえる。

T は内容把握の確認に T&F テストを使用し、そのワークシートを音読させることで学習のまとめをしている。Rosser 氏は T の作成したワークシートを生徒のレベルに合ったものと高く評価しており、ワークシートの効果的な活用を勧めている。今回 MT を行った 4 名の学生のうち 3 名がワークシートを使用している。また、今回 MT を行わなかった学生の 71% もワークシートの使用を予定していた。授業でワークシートを使用する場合、時にそれは教室のゴミまたは紙飛行機と化する恐れがあり、取り扱いには十分注意したい。相原 (1999) はワークシートの取り扱いについて、例文は身近な題材にすること、問題量は適当であること、ワークシートのための時間を確保すること、ワークシート貼付用のノートを作らせること、ノートは頻繁に提出させ評価してすぐに返却すること、などを提案している。今回学生が作成したワークシートの中には、原稿の文字が不鮮明なもの、例文に誤りがあるもの、用紙の大きさに配慮が欲しいものなどがあり、これらもワークシートを使用する際に考慮する点として追加する必要があるだろう。

5.5 より望ましい TT の展開に向けて

以上、学生の MT から望ましい TT の形態を示してきた。本時の指導内容が本文指導ということもあってか、生徒、JTE、ALT 間のインタラクションやコミュニケーションを主体とした学習内容が少なかったのは残念である。相原 (1999, 2000) が紹介している「情報収集ゲーム」や「証明学習」のようなコミュニケーション活動を取り入れることによって、教室に実際に近い英語のコミュニティーを作り出し、英語の授業を言語活動中心的なものに変えることができるだろう。

本論を通して述べてきたように、JTE は TT のあり方や望ましい形態について正しく認識しておく必要があるが、それだけでは理想的な TT の実現は難しい。今回の授業を通して学生は、望ましい TT を展開していく上での JTE のあり方も学び取っている。例えば、JTE は自らが積極的に ALT とコミュニケーションしている姿を生徒に見せることによって、生徒にも英語を使ってみようという意欲を持たせることができる。「日本人の先生が ALT と英語を話すのを見てかっこいいと思い、自分もいつかは英語を話せるようになりたいと思った」学生の存在がそれを証明している。ある学生が「ALT にいろいろなことを頼

むのは悪いと思っていたけれど、ALT はそれを期待していることがわかった」ように、より良い TT の展開のために JTE は ALT を積極的に「使う」ことも必要である。協同で授業を行うのであるから、JTE と ALT との間に良い人間関係を築くことが大切であるのはもちろん、ALT と生徒、ALT と他教科担当の教師の間に好ましい人間関係を築くことも JTE の役割であろう。Rosser 氏は 2003 年 12 月の ESBAT (茨城大学学生、卒業生、教員、英語教育に関心のある人が英語教育について英語で論じる会) で彼の ALT としての 3 年間の経験を紹介しているが、改めて JTE が授業以外で積極的に ALT とコミュニケーションをとることの必要性を感じる。

英語がネイティブ・スピーカーだけのものではないことを知らせるのも JTE の役割である。それは日常の授業の中で JTE 自身が英語学習者であり、その目標が必ずしも純正な英語ではないことを生徒に伝えることを意味する。この態度表明は生徒に英語習得への新たな動機と意欲を与えらると思われる。Jenkins (2000) は、世界における英語の使われ方が変わってきた現在、英語教育のねらいも変わるべきだと述べている。英語使用圏の拡大は “New Englishes” を生み出した。ネイティブ・スピーカーの発音に近い発音ができることよりも、それぞれの地域の特性を保持しながらも相互理解が可能な共通部分の英語が使えることの方が、近年の英語教育のねらいとしては現実性があるだろう。

6. 結 語

本論では、ALT との TT が抱える問題のひとつとして JTE の TT に対する認識とその問題点を取り上げ、その対応策を考えることを目的として、相原が茨城キリスト教大学で担当する「英語科教育法」の授業の考察と分析を行った。第 2 節では、中学生と大学生を対象としたアンケート調査結果から中学校における TT の状況と JTE の TT に対する姿勢を明らかにし TT のあるべき姿を導きだした。第 3 節では、大学生が TT をどのように考えているかを示し、彼らが TT を行うことを楽しみにしている半面、不安に感じていることを明らかにし、英語教員養成の段階で TT を体験することの必要性を示した。第 4 節では、学生による TT の MT を紹介し、第 5 節では、それらの授業を分析しながら望ましい TT の形態を示した。学生の授業は改善の余地はあるものの、望ましい TT の形態として有益な資料をいくつも提供している。また、TT のあり方や望ましい形態を理解しただけではその実現は不可能であることも示した。TT は JTE、ALT、生徒の協同作業ではあるものの、それが成功するか否かは JTE の英語能力、指導力、そして人間性にかかっているといても過言ではない。望ましい TT は JTE が常に自己の能力と資質の向上を目指して研鑽を積んでこそ実現できるものであるといえよう。

引用文献

- 相原和恵. 1998. 「先生のポケットはドラえもののポケット」『総合教育』(小学館), 第 53 巻第 15 号, 64—68. (『中学教育』(小学館), 第 43 巻第 16 号, 60—63. にも所収.)
- . 1999. 「先生のポケットはドラえもののポケット Ver.2.1.」『研究所報』(茨城県国民教育研究所), 第 25 号, 273—305.
- . 2000. 「先生のポケットはドラえもののポケット 99」『第 23 回研究論文集』(茨城県教育委員会), 1—16.
- . 2001. 「先生のポケットはドラえもののポケット・ミレニアム」『平成 12 年度教育研究論文集』(茨城県教育会), 49—52.
- 相原和恵・長澤邦紘. 2004. 「効果的な ALT とのチーム・ティーチングを目指して」『茨城大学教育学部紀要 (教育科学) 第 35 号』(茨城大学教育学部), 259—273.
- 赤松信彦. 2003. 「リーディングの指導」石黒昭博他『現代の英語科教育法』(英宝社), pp.81—96.
- Jenkins, J. 2000. *The Phonology of English as an International Language*. Oxford: Oxford University Press.
- 文部省. 1999. 『中学校学習指導要領』(文部省).
- 塩澤利雄. 1993. 「ネイティブ・スピーカーとのチーム・ティーチング」塩澤利雄他『新英語科教育の展開』(英潮社), pp.154—163.
- 竹田幸正. 1995. 『音読・朗読による国語教室』(教育出版).
- 土屋澄男. 1995. 『英語科教育法入門』(研究社出版).
- 卯城祐司. 2001. 「チーム・ティーチング」望月昭彦『新学習指導要領にもとづく英語科教育法』(大修館), pp.157—166.
- 和田稔. 1990. 『Team Teaching と教科書の活用』(開隆堂出版).
- 山内信幸. 2003. 「指導補助手段」石黒昭博他『現代の英語科教育法』(英宝社), pp.154—169.

Team-Teaching with ALTs in Junior High Schools — From the Students' Micro-Teaching Observation —

Kazue Aihara

Team-teaching with Assistant Language Teachers (ALTs) has been a part of English classes in Japanese junior high schools since 1987. The purpose of this paper is to discuss how team-teaching with ALTs should be done. To begin with, we will survey the present condition of team-teaching by reviewing the results of a questionnaire taken in 2003 by the students at two different junior high schools as well as the students of my own class at Ibaraki Christian University. Then, we will consider the university students' own perceptions about team-teaching. Finally, we will observe examples of micro-teaching conducted by my students and Mr. Christopher Rosser (a former ALT in a junior high school) in an attempt to illustrate some ideal methods of team-teaching with ALTs in junior high schools.